

## 【参考様式3】 普及指導活動の概要

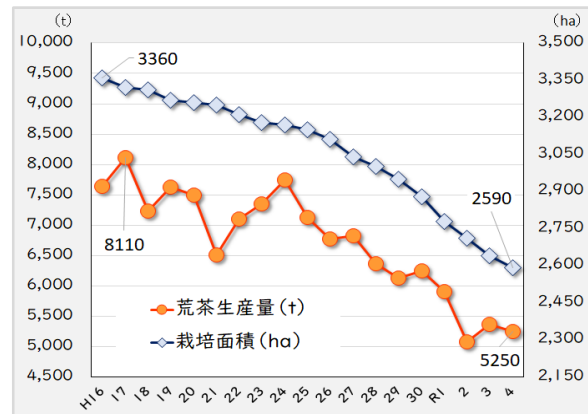
### 基本計画名 「伊勢茶産地を次世代につなげる構造改革の推進」

#### 1 計画の背景（現状、問題点）

全国第3位の茶産地であり、令和5年の農業産出額が50億円を超える茶は、県農業にとって重要な品目です。普及センターでは、これまでGAPの指導など個々の農家の経営強化を通じて三重県茶業の振興に取り組んできました。

それらの活動は、大規模茶農家の経営改善に一定の効果はありましたが、長年続く茶単価の低迷などによって疲弊する中小農家の経営意欲を繋ぎ止めることはできませんでした。結果的に、茶工場の廃業や離農が進み、茶業の衰退に歯止めをかけられていないのが現状です。

そこで、これまでの個々の農家への支援に加え、市町や関係機関が一体となって地域の茶業を面的に支える取組を進めることとしました。



#### 2 目標（めざす姿）

三重県の茶産地が維持・発展できるよう、集落や地域で茶園の維持について定期的に話し合うなど、茶園の有効活用に向けた環境づくりが進んでいるほか、農家の強みを活かした生産・販売の実現や次代を担う若手農家が育つ環境が整備できています。

#### 3 普及活動の内容、方法

##### <活動内容>

##### (1) 農地の利用合意形成に向けた支援

農家の規模にかかわらず多様な経営体の継続に向け、優良茶園の集約に向けた取組を進めます。茶園の集約は、個人では解決が難しい場合もあることから、農家はもとより市町や農協、県などの関係者が一体となって、農家組織や集落、産地に働きかけます。

## （２）所得確保に向けた支援

自販など多角販売の経営体や他品目との複合経営体など、様々に努力を行っている茶産地の担い手が、自身の経営の強みを活かした生産・販売を行いながら、変化の激しい情勢を柔軟に乗り越えていけるよう、多様な課題の解決に取り組めます。

## （３）人材育成に向けた支援

次代の茶産地を担う若手農家が、何事にも積極的な姿勢や様々な情報を収集する能力を身に着け、時代の変化に対応できる経営者として成長する支援を行います。

### <活動方法>

活動については、【伊勢茶振興計画】に位置づけられている「産地構造改革プロジェクト」の取組と並行して進めています。産地構造改革プロジェクトとは、個々の農家では解決が難しい産地課題について、農家や市町、JAなど、関係者が一体となって解決に取り組むワーキンググループです。市町や地域農林事務所など関係機関と連携しながら、課題解決に向けた取組を進めています。

プロジェクトの取組を通じて、茶園利用に向けた農家の意向把握や課題の明確化などに取り組むほか、加工原料や輸出など需要に応じた売れる茶の生産やコスト意識の徹底による経営改善、スマート農業機械の導入や他品目の導入などに取り組んでいます。また、若手農家同士が切磋琢磨しながら成長していけるように、地域や品目、業種を越え、あらゆる人達と交流を図るよう働きかけるとともに、そのような場づくりに取り組んでいます。

## ４ 成果及び成果を上げた要因

### <活動結果>

プロジェクトは、県内の地域ブランド産地の８割にあたる９地域で立ち上っています。

【四日市市水沢地区】では園地流動化を含めた茶園の荒廃防止

【鈴鹿市岸田地区】では市場出荷産地としての生産力の維持

【いなべ市石樽地区】では観光と連携した産地ブランドの維持

【亀山市中の山地区】では経営を強化した大規模経営体による園地の維持

【松阪市飯南・飯高地区】では生産面積の維持に向けた生産加工体制の見直し

【大台町栃原新田地区】では茶園継承の仕組みづくりと継承経営体の維持

【度会町平生地区】では産地生産力の維持に向けた中心経営体の経営基盤強化

【大台町神瀬地区】では産地維持に向けた茶園継承の仕組みづくり

【度会町長原地区】では担い手への茶園継承への仕組みづくり

を目標として、市町や地域農政事務所など関係機関と連携しながらそれぞれ取組を進めました。

### <対象の変化>

【四日市市水沢地区】では、耕作をやめる茶園の継承について、これまで明

文化した規則がなく、個々の農家にその対応を一任していました。その結果、周辺の農家が認知しないまま、突然放棄茶園になってしまうケースもみられたことから、茶園の荒廃防止には耕作をやめる場合のルール作りとその見える化が不可欠でした。そこで普及センターが中心となり、農家と話し合いを進めた結果、地区内の緑ヶ丘防霜ファン利用組合で取り決めを策定することができました。現在、この取り決めは、周辺の2つの防霜ファン利用組合に採用されるなど、地域内への波及が始まっています。



この取り決めは、周辺の2つの防霜ファン利用組合に採用されるなど、地域内への波及が始まっています。

【鈴鹿市岸田地区】は、市場出荷を主体とする農家で構成されており、コロナ禍以降の茶単価の急激な落ち込みに大きな影響を受けた地域です。農家と意見交換するなかで、直販産地に方向転換するのではなく、従来市場出荷産地としての生き残りを考えることとなりました。

そこで、市場単価が高値で安定している有機栽培碾茶の栽培を検討することにしました。有機栽培の研修や先進地の視察などを通じて検討を進めた結果、栽培に挑戦したいと考える農家が複数現れたことから、有機栽培の研究会「Ise Cha Organic Laboratory KISHIDA」を立ち上げ、支援体制を整えました。



【いなべ市石樽地区】は、文化庁の100年フードに認定されている歴史のある茶産地ですが、農家数は4戸まで減少しており、産地の存続が懸念されています。座談会を開催し、市やJAを交え農家と意見交換を重ねた結果、少数精鋭という点や農家それぞれが持つ強みを活かす方向で産地振興に取り組むことが決まりました。

そこで、農家全てが自販店舗を構えている点や、いなべ市が観光誘客に力を入れていることから、観光分野と連携した振興を検討しました。その結果、いなべ観光を代表する土産物を石樽茶で作ることができました。なお、この商品は、市内企業の贈答品に採用されるなど、観光以外にも石樽茶のプレゼンスを広めることにつながりました。



### <目標と実績>

本年度の活動によって、**農地の利用合意形成に取り組む産地数**については、地域計画を茶生産の観点から見直した「飯南地区」「飯高地区」の2産地、**所得確保に向けた実践数**については、補助事業の申請支援を通じて生産や販売計画などを整理指導した「まるろく製茶」「深緑茶房」「茶来まつさか」の3取組、**人材育成のための実践数**については、茶工房香肌の村瀬氏とヤマキ高橋製茶の加藤氏を支援し、計画通りの実績を上げることができました。

指標項目	令和 4年度	令和 5年度	令和 6年度	令和 7年度	令和 8年度
	現状値	実績値	実績値	実績値	目標値
農地の利用合意形成に取り組む産地数	1	1	3	5	6
所得確保に向けた実践数	—	7	13	16	20
人材育成のための実践数	—	4	10	12	15

### <成果を上げた要因>

地域農林事務所や市町、JA等とプロジェクト体制を組んで、関係機関が一体となって活動できたことに加えて、普及センターがこれまで培ってきた人脈をフルに活用して、産地としての課題の把握に努めたことも成果を上げることができた大きな要因だと考えています。また、所得確保や人材育成に向けた活動は、産業支援センターや農林水産支援センターなど、関係機関の取組を十分に活用して、より専門的な支援を行うことができたことが成果に結びついたと考えています。

## 5 残された問題点及び今後の取組

地域の茶産地は地域一体となって守るという考えのもと、本計画は策定されました。しかし、茶単価が年々下落し、廃業もやむなしの空気が農家に広がるなか、主役である農家の意識を茶産地の維持に向けることは想像した以上に難しいものでした。プロジェクトによっては、農家の関与が十分でないものもあり、取組を進めるには、農家の意識を産地全体にいかに向けるかが課題です。

そのような状況の中、今年は茶が例年になく高値で取引され、来年も同様の傾向が続くといわれるなか、農家の気持ちに余裕が生まれており、次年度は茶産地の維持を考える絶好のタイミングとなっています。この絶好の機会を逃すことなく、取組を進めるため、現在、茶農家に経営状況や必要な支援策などを問うアンケート調査を実施しています。その結果を解析し、茶農家が必要とする普及活動ができるよう、しっかり検討したうえで取組を進めます。

## (課題名) 伊勢茶産地を次世代につなげる構造改革の推進の取組

中央農業改良普及センター

活動対象 鈴鹿市岸田地区産地構造改革プロジェクト

### 1 背景とねらい

【鈴鹿市岸田地区】は、市場出荷を主体とする農家で構成されており、コロナ禍以降の茶単価の急激な落ち込みに大きな影響を受けた地域である。また、地域の担い手に若い農家が多いので、当該地域を活性化することは、三重県茶業の振興からみても重要な意味があると考えている。なお、農家と意見交換するなかで、直販産地に方向転換するのではなく、従来市場出荷産地としての発展を考えることとなった。

### 2 活動内容

#### (1) マーケットイン研修会開催

岸田地区に限らず、茶業界では、できた荒茶を単に市場に流すプロダクトアウトの販売が一般的である。農家と地域の将来を話し合うなかで、そのような販売を続けていては、低迷を続ける茶市場で生き残ることはできないという考えに至った。そこで、近年頭角を現し、茶業界を牽引している「多田製茶」を招聘して、マーケットインに基づく生産と販売を学んだ。



#### (2) 有機茶先進地視察

昨今の茶市場の情勢を鑑みると、碾茶は単価が比較的安定しており、特に海外から引き合いの強いオーガニック碾茶はより高値で取引されている。そこで、有機碾茶栽培の先進地である鹿児島県を視察し、有機茶栽培を行うにあたっての心構えをはじめ、栽培や加工に関する様々な知見や技術を収集した。鹿児島の農家との意見交換では、オーガニック碾茶の可能性を改めて認識することとなった。



#### (3) 有機栽培シンポジウム参加

有機茶栽培のさらなる理解を深めるため、農研機構シンポジウム「未来茶業・有機茶研究会キックオフシンポジウム」に参加した。最先端の研究者と交流することで、有機茶栽培の知識を深めることができた。



### 3 活動成果

#### (1) 有機栽培研究会の立ち上げ

研修会への参加や先進地の視察などの結果、農家3戸から有機栽培に挑戦したいと相談があった。市場出荷産地であることを考えて、関係する茶商にも相談したところ、有機茶販売への理解が得られたため、農家が主体的に動くことができるよう、有機栽培の研究会である「Ise Cha Organic Laboratory KISHIDA（以下、IOLK）」を本年8月19日に立ち上げた。



組織化は情報共有を容易にするだけでなく、有機茶栽培を試みるなかで今後表面化するであろう栽培上の課題についても、個でなく面で解決に取り組むことができる。

また、組織化することで、鈴鹿市などの関係機関からの支援を受けることも容易となった。農研機構シンポジウム「未来茶業・有機茶研究会キックオフシンポジウム」については、市役所の補助を活用して参加した。

なお、IOLKの取組には近隣地区の農家も関心を示していることなどから、この取組は県の有機茶栽培におけるオピニオンリーダーとなる可能性を秘めており、普及センターとしてしっかりと支援していく。

Isecha Organic Laboratory KISHIDA 申込書

お申込み年月日		年	月	日	
氏名		姓	名	日	
住所		〒		a	
電話番号					
少くも半段で想定される有機栽培推進の目標を設定してください。					
	1年後	2年後	3年後	4年後	5年後
お申し込みの意					
お申し込みの意					
※その他、他に別添資料がありましたら、ご前申にて記入ください。					
※裏面の会員規約に同意の上、申し込みます					



#### (2) 岸田地区茶園のデジタルマップ化

有機茶栽培では利用できる資材が慣行栽培と異なることから、茶園は集まっていたほうが取り組みやすいと考えられている。そこで、地区内で茶を栽培している農家から聞き取りを行い、現在の耕作状況を明らかにした茶園マップを作成した。

このマップを参考に、市役所が作成する地域計画と連携した有機栽培のブロック化を模索していきたいと考えている。

なお、このマップは県が権利を有するM-GISを活用し作成したものであり、今後はIOLK会員であれば誰でも自由にマップを改良できるよう、IOLKでgoogleアカウントを取得しgoogleマップを活用したクラウド上で管理を進めていく予定である。

